

「既定性」を中心としたノダ文分析の限界

名嶋 義直

キーワード 既定性、既定命題、関連づけ、文脈の改変

0. はじめに

本稿は、従来からノダ文の研究において中心的な論考の一つであった「既定性」を取り上げ、その観点からの考察における問題点と限界を指摘する。そして、それに替わる視点として「文脈の改変」という視点を提案し、その有用性を論じる。

1. 考察対象

ノダ文は、ノダの必須度という観点から大きく3通りに分類することができる。先行研究における例文で分類すると以下ようになる。

a類：ノダの使用が必須であると考えられる場合。

- (1) (一人で泣いている子供を見て) きっと迷子になったんだ。
(庵他2000:270)
- (2)# (一人で泣いている子供を見て) きっと迷子になった。^{注1}
- (3) (それまでわからなかった機械の使い方がわかったとき)
なんだ、このボタンを押せばいいんだ。
(庵他2000:273)
- (4)# ((3)と同じ状況で) なんだ、このボタンを押せばいい。
- (5) 「ここには誰も住んでませんよ」
「ふーん、空き部屋なんだ」
(野田1997:82)
- (6)# 「ふーん、空き部屋だ」
(野田1997:82)
- (7) (ビールを飲んで) 「うまいんだな、これが」
(野田1997:88)
- (8)# (ビールを飲んで) 「うまいな、これが」

b類：ノダを用いた方が許容度が高いと考えられる場合。

- (9) 昨日は学校を休みました。頭が痛かったんです。
(庵他2000:270)
- (10) 昨日は学校を休みました。頭が痛かったです。

(11) 僕、明日は来ないよ。用事があるんだ。(野田1997:72)

(12) 僕、明日は来ないよ。用事がある。

c類：ノダがなくても問題なく許容される場合。

(13) 昨日はどこに行ったんですか。

—京都に行きました／行ったんです。(野田1997:70)

(14) 今日、私は大学を卒業した。明日からは学生ではないのだ。

(庵他2000:273)

(15) 今日、私は大学を卒業した。明日からは学生ではない。

b類とc類においてノダを用いた場合と用いない場合とでは聞き手の理解するニュアンスにかなり明確な差違が生じる。例えば、b類でノダを用いない場合、極論すれば先行発話と切り離して単なる事実描写を行っていると思えることもできる。例えば、日記文のような場合である。一方、ノダが用いられれば先行発話との結びつきが強く感じられ、ノダ文単独ではなく先行発話の原因や理由として理解される傾向が強くなる。c類でノダが用いられない場合も単なる事実描写文として理解される。一方、ノダを用いた場合、一種の「押しの強さ」のようなニュアンスが感じられる。これらは、ノダの持つ「手続き的意味」のためであると言えよう。^{注2}

次章以降では、ノダが必須とされる点でよりプロトタイプの特徴を持つと思われるa類のノダ文を中心に分析を行う。^{注3}

2. 先行研究

先行研究におけるノダの分析では「既定性」「既定命題」といった術語が重要なキーワードとして用いられている。ここで問題となるのは、既定とはどういうことかという点である。既定という概念は野田(1997:66)が述べているように、実に「微妙」であるからである。

実は、ノダ研究において既成命題という言葉をはじめて用いたと思われる三上(1953:239)においても明確な定義はなされていない。しかし、ノダをテンス上「反省時」と位置づけている点、前文との時間的關係は「順ではなく『逆』である」や「出来事の順序が逆転している」(共に同:241)と述べていることから考えると、既成命題とは発話時を基準にして「現実世界において既に成立している事態を表す命題」であると考えていたと思われる。

三上(1953)を踏まえた国広(1985:9)は「既成とは過去の事実とは限らず、未来についての既定の計画でもある」と述べている。この定義は国広(1992:

19)で「既定」と呼び変えられ、既定命題は「主観的にそう認められるものである」ことが強調されている。

益岡(1991:143)は、ノダ文の考察において、「真であることが確定した文というのは、既に起こった事態を叙述するものとは限らず、未来に起こる事態でも確定的なものと認められる場合であればかまわない」と述べている。田野村(1990:5-7)でもノダが表すものは「背後の事情」と「すでに定まっていると想定される事情」であると述べられている。両者共に既定という術語こそ用いてはいないが、既定性・既定命題との共通点が見て取れる。

野田(1997)は、厳密に言うとは既定という術語を明確に定義しているとは言えない。しかし、pp.64-66にかけての記述から、既定であることを「すでに定まったもの」として捉えているようである。また、『既定の事態として捉える』というのは話し手の捉え方であり、『Qが実際にすでに成立している』ことと同一ではない」とも述べている。^{注4}

佐治(1997)は氏の一連のノダ研究をまとめたものと位置づけられるが、ノダの特性の一つに「既定事態化の表現」を挙げている。その表現を借りれば、「既定事態化」とは「<その述語の表す判断が客体化され、固定化される>」ことであり、言い換えれば「<その述語によってまとめられ、描かれる事柄が客体的に成り立つものとして言われる>」ことであり、「<その事態を既定のものとして言い表わす>」ということになる。氏は「これは国広説の『既定命題』に当たると言ってもよいであろう」とも述べている。^{注5}

先行研究における既定命題の特徴を集約すると⑩のようになろう。

⑩ 先行研究における既定命題の意味特徴

<発話時において><話し手にとって><真偽が確定している>と
<話し手によって想定される><過去・現在・未来の事態を表す>命題

⑩の定義自体は妥当であるとしても、^{注6}なぜ既定と捉えた場合にノダが必須となるのかという点については、先行研究において明確な説明がなされているとは言い難い。例えば、国広(1992)では「既定命題として提出する」ことがノダの意義素として示されているが、これはいわば、ノダがある命題を「既定命題として提出する」という機能を持つと述べているに過ぎない。本稿も、既定ということが話し手の捉え方であることに異存はないが、話し手が「既定と捉えた」場合にノダが用いられるとするならば、話し手がどのような場合に事態を既定であると捉え、ノダを用いるのかという問題に回答を示す必要がある。しかし、それは以下のような点で困難であると考えられる。

3. 既定性分析の限界と新しい考察視点の提案

3. 1. 既定性による説明の問題点

先行研究でいう既定命題とは「真偽が既に確定していると話し手が見なす命題」である。この既定性や既定命題という観点からノダ文を分析しようとすると、いくつかの問題が生じる。それは「既定と捉えていること」が果たしてノダの中心的な機能であると言えるのか、という問題提起となる。^{注7}

(17) (残しておいたケーキがない) 誰かが食べたんだ。

(18) (残しておいたケーキがない) 誰かが食べた。

(17)(18)共、「た」という過去・完了を表す言語形式の使用から分かるように、ある事態が既定であると話し手に認識されていると考えられる。しかし「食べた」と「食べたノダ」とでは明らかに違いが感じられる。仮に「た」もノダも共に既定性を表すとすれば、(17)は冗長な表現となるはずであるが、そのようなことはしない。とすれば考えられるのは、ノダは、①「既定と捉えていること」を表しているのではない、②「既定と捉えていることだけ」を表しているのではない、③「た」が表す既定性とノダが表す既定性とは性格が異なるものである、のいずれか（またはその複数）であろう。^{注8}

既定性の問題は過去・完了を表すタ形の場合だけに限らない。例えば、(19)のような動作性意志動詞による近未来事態の描写の場合にも問題となる。

(19) 明日どこに行くんですか。

—京都に行きます／行くんです。

野田(1997)が主張しているように、ノダが用いられている場合、話し手が命題を既定のこととして聞き手に提示しているとする、ノダが用いられていない場合、話し手は命題を既定のコトとしては提示していないことになるのかという疑問が生じる。しかし、そうではないことは母語話者の直感として明らかである。既定のコトとして捉えているからこそ「行きます」という形式で近未来の事態に対する話し手の意志を言い表わしていると考えられるからである。したがって、話し手が事態を「既定のコトとして」捉えていたとしても、その話し手の態度を「ノダが」表しているとは考えにくい。

先行研究は、(20)のような「予想もしない事態に遭遇した」(野田1997:80) 場合や「突発的に生じた事態」(田野村1990:28)を言語化する場合、事態が「すでに定まっていたかどうかなど考える余裕はないので」^{注9}ノダは用いられないと述べている。つまり、既定と捉えられていないためノダは用いられないということになる。また「事実の発見」と同時に「直ちにそのことを言語化する」

場合にはノダが用いられないとも述べている。^{注10}

(20) あっ、犬が死んでいる。

(21) # あっ、犬が死んでいるんだ。

その説明は一見射ているかのように思えるが、(17)(18)と類似した問題を内包しているという点で問題がある。「ている」という言語形式も、ある事態が「既定である」と捉えられていることを表していると考えられる。とすれば、(20)は「既定であると捉えられている」にも関わらず、ノダが用いられていないことになり、(21)は「既定であると捉えられている」にも関わらず、ノダを用いることができないことになる。果たして「既定であると捉えること」と「ノダの使用」とが関係しているのかどうか疑問に感じる。また、次の(23)と(25)が適格であることを説明できないという問題点もある。共に「突発的に生じた」「予想もしない事態に遭遇」し「直ちにそのことを言語化」していると考えられるからである。

(22) (出かけに外に出て) あっ、雨が降っている。

(23) (出かけに外に出て) あっ、雨が降っているんだ。

(24) (餌をやろうと犬小屋を覗いて) あれ、ポチ昼寝している。

(25) (餌をやろうと犬小屋を覗いて) あれ、ポチ昼寝しているんだ。

(22)・(24)と(23)・(25)との違いを既定性によって説明しようとすれば、同一の状況であっても話し手が(22)・(24)は非既定、(23)・(25)は既定と捉えていると説明せざるを得ない。しかし、その区別の根拠は「話者の判断」に求める限り、明確には見い出せない。話し手がある事態を既定と捉える根拠が明確ではないということである。また、この考えによれば、話し手がある事態を既定と捉えればどんな事態でもノダで表せるということになる。そうすると、(21)は必ずしも不適格であるとは言えないということになる。

「何かが死んでいる」という事態の発見はその事態の持つ性格からして既定とは捉えにくいという反論も考えられる。しかし、この反論は当たらない。(29)のように「まだ(犬が)死んでいる」という事態を発見した場合であってもノダを用いることができる場合があるからである。

(26) (学校へ行く途中で) あっ、犬が死んでいる。

(27) (学校へ行く途中で) # あっ、犬が死んでいるんだ。

(28) (学校からの帰り道で) あっ、まだ(犬が)死んでいる。

(29) (学校からの帰り道で) あっ、まだ(犬が)死んでいるんだ。

また a 類のノダではないが、(30)と(31)との違いも、先掲(17)・(18)、(19)と同様、既定性の有無という観点からは説明できない。

(30) A: (コピーしている人に) あと、どのくらいかかりますか。

B : (コピーカードを抜きながら) もう終わりました。

(31) A : (コピーしている人に) あと、どのくらいかかりますか。

B : (コピーカードを抜きながら) もう終わったんです。 (実話)

(30)・(31)とも、「コピーが終わった」ということはB自身にとって既定であると思われる。したがって、なぜ(31)でノダが使用されるのかという点を既定性の有無という観点から説明することは困難であると思われる。^{注11}

以上から、既定性・既定命題という概念はノダの使用に何らかの関係を持つとは考えられても、その概念を中心としてノダの特徴を包括的に説明することは必ずしも有効ではないと考えられる。

3. 2. 文脈という視点の提案

本稿でいう文脈とは、いわゆる関連性理論^{注12}でいうところの文脈を意味する。つまり、文脈とは、先行発話や発話状況のみにとどまらず、人が推論や発話解釈に用いることができる情報の部分集合である。^{注13}関連性理論では、ある発話や外的な刺激が文脈を変化させることを「文脈効果」と呼び、^{注14}この文脈効果の度合いが大きい程、その発話や刺激の関連性が高いとする。一方、発話解釈には労力、言い換えればコストが必要である。したがって、発話の処理コストが低ければ低い程、関連性は高くなるとする。つまり、関連性の程度は「文脈効果の大きさ」と「発話処理コスト」との相関で決定されることになる。また、人は最も低いコストで最も高い文脈効果を得ようとする性向があるとする。この二つの観点から、聞き手は「最も低いコストで最も大きな文脈効果を得ることができるような発話」を話し手が行うものと想定することができる。また、話し手は「聞き手が『話し手は、聞き手が最も低いコストで最も大きな文脈効果を得ることができるような発話を行った』という見込みの下で、当該発話を『最も低いコストで最も大きな文脈効果』を得ることができるよう解釈しようとする」と想定する。

この文脈効果を生じさせる推論を本稿では関連づけと定義する。つまり、関連づけとは「ある文脈と新たに受け入れた情報との組み合わせによって文脈効果を得る推論行為である」と定義できる。

注14で引用したように、文脈効果には3つの下位分類がある。まず、ある発話が既存の文脈の信憑性を高める場合である。これは「強化」と呼ばれる。次に、ある発話が既存の文脈と矛盾し、その結果、既存の文脈が破棄される場合である。これを本稿では「却下」と呼ぶ。三番目は、ある発話が既存文脈と組み合わせることによって新しい含意を生み出す場合で「文脈含意」と呼ばれる。関連性理論ではこのような文脈効果が導き出される場合、そしてその場合に限

り、当該発話が関連性を持つと見なす。

4. 「文脈の改変」という観点から見たノダ文

本節では、従来の先行研究で明解な説明が困難であった、既定性とノダとの関係について、文脈の改変という観点から考察する。

まず、先行研究において、ノダの選択基準が話し手の既定性判断であるとされる例として先掲の例文(2)～(5)を以下に再掲する。

- (32) (出かけに) あっ、雨が降っている。
 (33) (出かけに) あっ、雨が降っているんだ。
 (34) (餌をやるうと犬小屋を覗いて) あ、ポチ昼寝している。
 (35) (餌をやるうと犬小屋を覗いて) あ、ポチ昼寝しているんだ。

(32)・(34)では命題が既定であるとは捉えられていないが、(33)・(35)では既定であると捉えられているためノダが使用されるというのが従来の考え方である。それに対し本稿では「文脈の改変」がノダに選択に関わっていると考える。事態知覚によって話し手が何らかの文脈を呼び出し（または既に発話時以前に呼び出しており）、その事態が文脈を改変させることによって関連性を有することになった場合、ノダが用いられうる、という考え方である。

(33)・(35)のような、事態の知覚に伴い発話されるノダ文の場合、呼び出されうる文脈は話し手が「当然そうである(あろう)」と考えて普段は意識していないような性格を持つ「話し手の認識」を表す命題であることが多い、と考えられる。(35)を例に言えば「ポチは起きている」という文脈である。したがって、文脈を改変することになる命題は、ある事態の知覚によって形成された「文脈とは異なる認識」であることになり、結果的に「知覚した事態の描写」と同音形の発話が起ころうることになると考えられる。

(32)は文脈が呼び出されていない状況で「雨が降っている」という事態を知覚し、発話したものと思われる。話し手は発話にあたって「雨が降っている」と考えていたとは考えられないからである。しかし、(33)もやはり「雨が降っている」という文脈を事前に有していたとは考えられない。「あっ」という語の使用が示すように、そのような文脈が事態知覚に先立ち呼び出されている状況での発話であれば、この発話は許容されない。

しかし、このことは(33)が何ら文脈を呼び出さなかったということを意味するものではない。実際、(33)はある文脈を呼び出していたと考える。その文脈とは「雨は降っていない」という文脈である。我々は世界の知識として「雨の降

る日より雨の降らない日の方が多い」という知識を持っている。この知識はいわば、当たり前のこととして通常は意識されることは少ないが、「雨が降っている」という事態を知覚した場合、この知識が活性化され「雨は降っていない」という文脈が呼び出されうる。そしてその文脈は事態の知覚によって形成された事態認識と対立し「却下」される結果となる。先に述べたように「却下」も文脈効果の一つである。つまり、㉓の「雨が降っている」は「文脈の改変」を伴った命題^{注15}であり、その点において話し手自身にとって「関連性のある命題」であるという性格を有していると思なすことができる。一方、「文脈を改変する命題」としてではなく、単なる事態として言語化する場合、㉒のようにノダは用いられないと考えられる。

この考え方に立つと、㉓や㉔のようなノダ文が一種の「驚き」といったニュアンスを伴う理由も説明できる。この「驚き」は文脈が「却下」されたことに対する「驚き」であると考えられるからである。つまり㉓や㉔は2種類の「驚き」をニュアンスとして帯びていると言える。㉓で言えば、「あっ（雨が降っている）」は事態の知覚に対する驚きであり、ノダ文は「文脈の改変」に対する驚きのニュアンスを帯びているということである。

野田（1997:80）は「予想もしない事態に遭遇した」場合、「すでに定まっていたかどうかなど考える余裕はないので」ノダが用いられないと述べている。「余裕はない」というのは、例えば、次のような場合であろう。

㉕ あっ、雨が降っている。洗濯物！

しかし、ノダの使用の有無は、どのような形で関連性を持つか、事態をどのような形で捉えるかという問題であって、心理的な「余裕」の問題ではないと考えるべきであろう。確かに㉓や㉔のようなノダ文には一種の「間」というか「一歩引いた態度」のようなものが感じられる。野田（1997）はそれを「余裕」と表現したのではないかと思われるが、これは、事態を文脈との関連づけによって相対化して捉えているところから生じるものであって、心理的な「余裕」ではない。^{注16}心理的な「余裕」がある場合であっても㉕のように単なる事態として捉える場合にはノダが使用されない場合も考えられる。ノダの使用は、ある事態が「既定として捉えられるか否か」ではなく、「どのような形で関連性を持つか」ということと関係があると考えられる。

㉖ （家の中でぼーっとしている。外に出かける予定もない）

あっ、雨だ。雨が降っている。

㉕㉖についても同様の分析が可能である。通常、人は「犬は昼間は起きていることもあれば寝ていることもある」という世界の知識を持っている。そのような知識はいわば当たり前のこととして通常は意識されないが、餌を与える際

等に「ポチが寝ている」事態を知覚した場合、「ポチは起きている」という文脈が活性化され、かつ、改変される。その事態が、文脈を改変したことによって関連性を持つ場合、ノダが使用できることになる。もしこれとは逆に、昼寝の時間が決まっていて、その時間に珍しく起きているのを見たという状況であれば、「あ、起きているんだ」と発話できる。ノダが使用できる理由は「ポチは今寝ている」という文脈が改変され、それによって関連性を持つことになると考えられるからである。もちろん「あ、寝てる」や「あ、起きてる」とも発話できるが、この場合は「文脈を改変した命題」としてではなく、事態そのものを述べている発話であると考えられる。

次に、ここまでの考察を踏まえ、(27)ではなぜノダが使用できないのかという点を考えてみたい。(26)・(27)を(38)・(39)として再掲する。

(38) (学校へ行く途中で) あっ、犬が死んでいる。

(39)# (学校へ行く途中で) あっ、犬が死んでいるんだ。

通常の生活において、人が「道で犬が死んでいる」という文脈を持つことはほとんどないと言ってよい。それと同様に「道で犬は死んでいない」という文脈を持つこともほとんどないと言ってよい。そのような文脈を持たない以上、「犬が死んでいる」という事態の知覚によってある文脈が改変される現象もありえないと言ってよい。したがって、事態を知覚した場合、通常の状態では(38)のように単なる事態の描写として発話される。しかし、(39)はノダの使用が、文脈の改変の結果生じたある命題を発話していることを聞き手に対して明示することになる。ここに許容されない原因が存在する。

とすれば、事態の知覚により「犬は死んでいない」という文脈が改変されることがあれば「犬が死んでいるんだ」という文が許容されることになる。そのようなことはあり得るであろうか。(28)(29)を(40)(41)として再掲する。

(40) (学校からの帰り道で) あっ、まだ (犬が) 死んでいる。

(41) (学校からの帰り道で) あっ、まだ (犬が) 死んでいるんだ。

(41)がまさに「犬は(もう)死んでいない」という文脈が改変された例である。人は「道で死んでいる小動物の死骸は役所や保健所などが片付ける」という世界の知識を有している。したがって、朝、見かけた犬の死骸は夕方にはもうないであろうと考える。したがって、(41)の話し手は夕方同じ道を帰る際に「犬は(もう)死んでいない」という文脈を持つことが十分あり得る。そのような状況で「犬の死骸がまだ存在する」という事態を知覚した場合、その文脈が改変されることによって関連性を持つ場合がありうる。その場合、ノダが使用される。注17一方、そのような文脈が改変されない場合、例えば、その事態をそのまま描写する場合(40)が発話されることになる。

次にこれらの考察がa類以外のノダ文分析にも当てはまることを先掲(30)(31)で確認する。(30)(31)を(41)(42)として再掲する。

(42) A：(コピーしている人に)あと、どのくらいかかりますか。

B：(コピーカードを抜きながら)もう終わりました。

(43) A：(コピーしている人に)あと、どのくらいかかりますか。

B：(コピーカードを抜きながら)もう終わったんです。

本稿の考え方で言えば、(42)Bは単に事態を描写しており、(43)Bのノダ文は「文脈を改変する命題」を提示しているということになる。この考え方の利点は、注11で触れたように(43)Bが「抗弁」のようなニュアンスを伴うことを説明できる点にある。「あと、どのくらいかかるか」という質問からも明らかなように、Aは「まだBのコピーが続く」という文脈を有していると考えられる。そして、(43)Bが提示した命題は「まだBのコピーが続く」というAの文脈を改変させることになる。しかし、同様の文脈効果は「コピーカードを抜くBの行動」からも導き出せるものであり、実際、AはBの行動を見てすでに「もう終わった」という想定を得、文脈を却下していたものと思われる。

そのような状況である命題を「文脈を改変する命題」として聞き手に対して提示するということは、聞き手に「文脈の再改変」を要請することになり、既に存在する聞き手の想定(Bのコピーが終わった)を念押しすることになる。聞き手が「そんなことは分かっている。念押しされるまでもない」と考えれば、話し手の発話意図を「分かりきっていることをあえて(または故意に)分からせようとした」と考えることにもなり、聞き手が「抗弁」や「嫌味」といったニュアンスを読み取る場合が出てくる、と考えられる。

もちろん(42)Aにおいても同様の想定がすでに聞き手の中にあったと言える。しかし(42)Bの発話は何ら聞き手の認知環境に変化をもたらさない。すでに「分かっている事態」の描写であり、新たな文脈効果を生じさせないからである。ただ、(43)Bにおいても同様の命題を提示している点は同じである。(43)Bにのみ「抗弁」や「嫌味」のようなニュアンスが感じ取られうるのは、(43)Bがある事態を、単なる事態ではなく「文脈を改変させた命題」として提示している点に起因すると考えられる。つまり、ノダの使用は聞き手の認知機構に直接関与するという特徴を持つと言える。^{注18}

以上の考察をまとめると、①ある事態の知覚によって話し手が持つ文脈が改変され、その新しく生じた事態認識を「文脈を改変させた事態」^{注19}として提示する場合ノダを用いることができる、②ある事態認識によって話し手が持つ文脈が改変された場合であっても、単にその事態描写を行う発話においてはノダは使用されない、の2点になる。

先に指摘したように、既定性という観点からの考察は、どのようにして話し手が当該命題を既定と判断するかという点が説明されておらず、その結果ノダの使用基準が曖昧になるという問題点がある。これに対し、文脈の改変という観点から考察すると、なぜ、ノダが使用できないかという問題を明確に説明することができる。「文脈の改変の有無」という点がノダ使用基準の一つとして考えられるからである。

5. 文脈の改変と既定性

5.1. 文脈の改変と既定性との関係

前章では、既定性・既定命題という概念を用いるよりも「文脈の改変」という概念を用いた方が、より明確にa類のノダ文を説明できることを示した。本節では、既定性・既定命題という概念も関連性理論の考え方と「文脈の改変」という観点から捉え直すことが可能であることを示す。

「関連づけ」の定式化に必要な要素は次の3点である。

(4) 関連づけに必要な要素

P：新たに知覚した情報（発話、事態等）に対する認識

C：文脈の一部

Q：新しく導きだされた想定

P、C、Qと既定性との関係を考えると次のようになる。まず、文脈Cであるが、これは文脈という性格、及び、既に呼び出されているということから分かるように、既定性を有していると考えることができる。その文脈を改変するきっかけとなるPは新たに知覚した情報（発話、事態等）であると考えられがちであるが、このPは話し手が知覚した発話そのもの、事態そのものではなく、話し手なりに発話や事態を捉え、心的または言語的に描写したものであり、話し手の思考の表示と言うべきものである。当然のことながら、その表示された思考は、現実世界において真であるかどうかは別として、話し手にとって真偽が確定しているという性格を持つものである。そのため文脈Cと同様、Pも既定性を有していることになる。関連づけの結果導き出されるQは、本稿で主に考察してきた例文のように音形がPと一致する場合もあれば、異なる命題形式をとる場合もある。ただ、いずれにせよQも「話し手にとって真偽が確定している」という点において既定性を有している、と考えることができる。^{注20}

以上から、関連づけを構成する3要素は全て既定性を備えた既定命題という性格を有していると言える。したがって、Pノダという発話であってもQノダ

という発話であっても、また、Cノダという発話であっても、^{注21}既定性という観点から見れば、既定命題を提示することになる。この点において先行研究でノダが既定命題を提示すると述べたことそれ自体は言語事実とその特徴を正確に記述していたと言える。ただ、ノダ文における既定性は、関連づけに必要な3要素が当然のこととして持ちうる性格であり、派生的な特徴と言うべきものであって、本質的な特徴ではない。その派生的特徴を中心的な特徴と見なしてきた点が従来の先行研究における問題点であると言える。

5. 2. 文脈の改変とノダの使用との関係

ここまでの考察で明らかのように、本稿では、ノダの使用に関与するのは「文脈の改変」の有無であって既定性ではない、と考える。では、その「文脈の改変」とノダの使用とはどのように結びつくのであろうか。

(45) (一人で泣いている子供を見て) きっと迷子になったんだ。(=(1))

(46) (それまでわからなかった機械の使い方がわかったとき)
 なんだ、このボタンを押せばいいんだ。(=(3))

(47) 「ここには誰も住んでませんよ」
 「ふーん、空き部屋なんだ」(=(5))

(48) (ビールを飲んで)「うまいんだな、これが」(=(7))

(45)では「単なる子供」を「迷子である」と認識した場合の発話であり、新しい想定が話し手の認知環境に追加されたという点で、文脈が改変されていると言える。(46)は「使い方が分からない」という問題が解決された状況での発話であり、ある事態の認識をきっかけとして文脈が改変された例である。(47)も「誰か住んでいる」という考えが「誰も住んでいない」という想定によって却下された状況での発話である。(48)は「このビールはうまい」という文脈を再確認している状況での発話である(注14で引用したように、ある想定の実偽判断の程度を高めることも文脈の改変である)。

ここまでの考察から考えると、a類のノダが提示しているの命題は「文脈を改変させることになった事態」そのものではなく「事態の認識をきっかけとして新しく生じた思考」であると考えられる。この考えに立てばノダ文における「ノダの使用と許容度の関係」について説明することが可能になる。

b類：ノダを用いた方が許容度が高いと考えられる場合。

(49) 昨日は学校を休みました。頭が痛かったんです。(=(9))

(50) 昨日は学校を休みました。頭が痛かったです。

(51) 僕、明日は来ないよ。用事があるんだ。(=(11))

(52) 僕、明日は来ないよ。用事がある。

c 類：ノダがなくても問題なく許容される場合。

(53) 昨日はどこに行ったんですか。

—京都に行きました／行ったんです。 (=(13))

(54) 今日、私は大学を卒業した。明日からは学生ではないのだ。 (=(14))

(55) 今日、私は大学を卒業した。明日からは学生ではない。

a 類のノダ文が提示するのが事態の知覚をきっかけとして「新しく生じた話し手の思考」であるのに対し、b・c 類の非ノダ文が提示している命題は「ある既定事態」であると考えられる。したがって、ノダを用いる必要はない。話し手にとって既定の事態を提示することそれ自体は「文脈の改変」を伴っていないからである。ただ聞き手の側から言えば、単なる既定事態の描写であっても「聞き手の文脈の改変」を引き起こすことがありうる。したがって、話し手が聞き手に対し、『聞き手の認知環境に新しく生じるであろう想定』として、いわば先回りして提示する場合はノダが使用されることもありうると考えられる。そのように考えれば、b・c 類においてノダが使用される場合と使用されない場合とがあることが説明可能になる。

同様の観点から、b 類においてノダを用いた方が許容度が高くなる理由も説明できる。b 類の例として挙げた例文は、ノダ文と先行発話との間に因果関係が見い出される例である。このような場合、話し手は「単なる既定事態」ではなく「用事があるので、明日は来ない」といった「聞き手に受け入れさせたい想定」を伝達しようとしていると考えるのが、より適切な発話解釈の方向であろう。その意図した伝達を成功させるためには、『既定事態』を提示しているのではなく、『聞き手の文脈を改変させることによって文脈効果を導き出す命題』を提示していること」を何らかの手段で明示する方が好ましいと考えられる。その機能をノダ担っていると考えられる。

ノダが提示する命題は「事態」ではなく、「文脈の改変」を伴う何らかの「思考や解釈」であると考えられる。

5. 3. ノダと既定性

このように考えれば、3. 1で取り上げた問題に回答を示すことができる。ノダは果たして既定性を表すのか、表さないとすれば何を表すのか、ノダが既定性を表すとすれば、「た」や「ている」が表す既定性とノダが表す既定性とはどのような関係にあるのか、という問題である。

まず最初の疑問点については「ノダは『既定性』を表す形式ではない」がその回答となる。ノダが表すのは、『文脈の改変』を伴う何らかの『思考や解釈』である」と考えられるからである。しかし、この「思考や解釈」は現実世界に

おける真偽に関わらず、確定したものとして聞き手に提示される。つまり、従来ノダが表すとされてきた既定性とは「確定した思考や解釈」が必然的に持つ派生的特徴であったと考えられる。先行研究では、ノダが提示する命題をノダ客体化された「事態」であると考え、それを前提として受け入れてきたと言える。そのような前提に立てば、単なる事態描写文との区別を記述するため何らかの差異的特徴を見出す必要に迫られることになる。そこで、本来は派生的な特徴である既定性をノダの本質(または、その一つ)として捉えることになったものと思われる。

ただ、国語学、日本語学の先達にとっても「た」や「ている」が既定性を有する言語形式であることは既に明らかであったはずである。にも関わらず、「ノダが既定性を有する」という主張が受け入れられてきたのはなぜだろうか。それは「た」や「ている」が表すとされる既定性が「事態生起に関する既定性」であるのに対し、ノダが表す既定性は上で述べたように「思考や解釈の確定に関する既定性」である、という違いがある。これが第二の疑問点に対する本稿の回答となる。いくつかの先行研究も母語話者の直観からその違いに気付いていたからではないかと思われる。^{注22}しかし、「事態」と「思考や解釈」とを明確に区別する立場を取らず、ノダが「客体化された事態」を表すことを前提として考える以上、ノダの表す既定性はあくまで「事態生起に関する既定性」と見なされることになる。ここに先行研究の内包する問題の根源があると考えられる。

6. まとめ

本稿では、既定性という観点からの考察における限界を具体例とともに示し、それに替わる分析視点として「文脈の改変」という視点を用いることの有用性を提唱した。そして、既定性という観点からは説明困難である問題が、この視点を用いれば説明可能になることを示した。また、ノダが表すとされてきた「既定性」は「思考や解釈の確定」から必然的、かつ派生的に生じる特徴であり、「た」や「ている」等が表す既定性とは異なるものであると考えられることを述べた。本稿で述べてきたような問題点を回避し、ノダの機能をより明確に記述するためにも、既定性をノダの中心的特徴とする論考は、有用性をその見直す時期に来ていると言えよう。

但し、本章で論じ残した問題が2点ある。第1点はノダ文と非ノダ文との相違点である。「ある事態認識によって話し手が持つ文脈が改変された場合、新し

く生じた想定をノダで提示することができる」と述べたが、想定を提示するだけならばノダを用いる必要はない。ノダ文は非ノダ文にはない何らかの機能を有しているが故に用いられると考えられるが、ノダ文が提示しているものが「想定のみではない」とすれば、一体何であろうか。第2点目の問題点は第1点目の問題点とも関係する。ノダの使用が任意である場合、ノダを用いるか否かの選択は何を基準にして行われるのかという点である。

これら2問題については、紙幅の都合もあり本稿では述べることはできない。拙稿、名嶋（2001 b）（2001 c）を参照していただきたい。

注

注1 「#」は、文法的だが想定された発話状況においては許容できないことを意味する。

注2 詳しくは名嶋（2001 a）、名嶋（2001 c）を参照いただきたい。

注3 プロトタイプの認定基準については初山（1995）を参照した。

注4 野田（1997：65）は『既定』という概念は微妙なので、『のだ』の性質の記述には必要であっても本質とするには問題がある」と述べている。しかし、一方で「非関係づけ」という分類を提唱し、それらのノダ文の特徴を「Qを（既定の事態として）把握する」「Qを（既定の事態として）提示する」ことであると述べている（同：67）。

注5 これらの記述はp.212から引用した。なお、研究史的観点から言えば、三上論文との関連で先に取り上げた国広（1985／1992）の既定命題説は一連の佐治論文に代表される「客体化説」の具体的な性格の規定となっていると考えられる。つまり、ある事態や判断をノで客体化することにより、その事態や判断が既定命題としてまとめあげられることになるということである。

注6 ノダ文に関する研究ではないが、中右（1983：549）では既定的知識を「ある事柄の知識（概念、命題）が、発話の時点に先立って、あらかじめ確定した話題として、話し手の意識のなかにあるとき、その知識は既定的である」と述べ、「話し手の側であらかじめ確定している知識は、必ずしも、話し手が真実としてみている知識ではない」と述べている。ただ、中右論文で詳しく考察しているのは補文命題やitとsoによる被照応要素、文主語などにおける既定性である。すでに広く知られているように、ノダ文は直接引用の場合をノデハナイを除いて補文とはならない。したがって、ノ

ダ文が聞き手に対して何らかの叙述を行っていると考え、ノダ文に関しては「話し手にとって真偽が確定していること」を既定性の条件に加えて問題ないと思われる。

- 注7 言うまでもなく、「あ、あった」の「た」や「～ている」等、様々な述語表現で既定性を表すことができる。既定性とは決してノダでなくては表せないというものではない。また、ノで客体化されているから、既定命題を表しているというのであれば、それはコトダ、ワケダといった形式にも見られる特徴であり、ノダに固有の特徴を記述しているとは言えなくなるであろう。
- 注8 最後（3番目）の考えは名古屋大学の小坂光一教授から指摘いただいたものである。また、5. 3での考察はその指摘に触発されて行ったものである。記して感謝申し上げる。
- 注9 野田（1997：80-81）を参照のこと。
- 注10 田野村（1990：28）、野田（1997：80-81）を参照のこと。
- 注11 この場合、一種抗弁するかのようなニュアンスを伴うが、この理由についても「既定性」「既定命題」という観点から記述することは困難であろう。同じく「既定として捉えられている」³⁰にはそのようなニュアンスが生じないからである。
- 注12 関連性理論は人間の認知システムの解明を目指すものである。したがって、ある特定の言語形式の研究自体が目的ではない。しかし、逆に言うと、広く普遍性を持った理論であると考えられ、それ故にその理論はある特定の言語形式の使用についても有益な知見を提供するものと考えられる。本稿でその枠組みを利用する理由はこの点にある。
- 注13 Carston & Uchida（1998：295）では文脈を以下のように定義している。
context : that subset of existing mentally represented assumptions which interacts with newly impinging information (whether received via perception or communication) to give rise to contextual effects.
- 注14 Carston & Uchida（1998：295-296）では文脈効果を以下のように定義している。
contextual effects : the kind of result which a newly received stimulus must bring about, by interacting with some of the assumptions already in the cognitive system, in order for it to be relevant to the system ; there are three types of contextual (or cognitive) effect it may have : supporting and so strengthening existing assumptions, contradicting and eliminating assumptions, combining inferentially with them to produce new conclusions.

- 注15 本稿では、便宜上ノダ文からノダを取り除いた部分を命題と呼ぶ。
- 注16 比較できない程微少ではあるが、単なる事態の知覚よりは思考に費やす時間が必要であろうし、事態を認識した上で分析的に捉えるという姿勢からも「事態そのものからの距離」を感じる。それを「余裕」と捉えられたのであろう。また三上（1953：241）では「連体命題『何々シタ』と提出『ノデアル』との間に隙間というか余裕というか、或る反省的な距りが存在する」と述べている。これも同様の観点から捉え直すことができるであろう。
- 注17 東南アジアのある国で数年間生活した知人によると、道端で犬が死んでいることは決して珍しいことではないという。したがって、「犬が死んでいるコト」は、それ自体では認知環境を変化させる程の関連性を持たず、「ゴミだと思ったら犬だった」等の形で関連性を持つことになる。その知人によれば「犬が死んでいるんだ」は充分許容できるという。「既定と捉えるコト」ではなく「認知環境の変化」がノダの使用に大きく関わることを示すコメントである。
- 注18 ノダを用いると説得力が増したり、多用しすぎると押し付けがましくなったり、(43のように) 場合によっては聞き手を不快にさせたりすることがあるのは、この認知機構への直接的関与という特徴が影響しているものと思われる。
- 注19 この「文脈を改変させることになった事態として提示する」という考えは5. 2で発展的に修正されることになる。
- 注20 真偽判断が保留され、「判断形成過程」（森山2000：63）にある場合は「だろう」が用いられるが、これはノダ文においても「ノダーノダロウ」という対立として見られる。
- 注21 Cノダという文は関連づけの方向を決める文脈を提示することで聞き手の解釈を話し手の意図するQノダに導く特徴がある。例えば、次のような例である。
- （スリングやロープを残置しないことと注意した後で）残置されたスリング/古ロープは降雨後、水分を長く残しますので、例えステンレスとて「錆び」を助長する原因となります。最近では酸性雨など問題も多いのです。
(<http://www.egroups.co.jp/group/waremenokai/>)
- 話し手が聞き手に伝達を意図することは「最近では酸性雨などの問題も多い」ということではなくて、「最近では酸性雨などの問題もあって、ステンレスと言えども簡単に錆びてしまう」ということであろう。話し手にとって「最近では酸性雨など問題も多い」ということは発話時に受け入れた情報ではな

く、また、新たに導き出した思考でもなく、既存の知識であり、発話時における文脈の一部であったと考えられる。話し手の発話（Cノダ）を受けて聞き手が行う関連づけは、次のようになると考えられる。

P：話し手は、最近は酸性雨など問題も多いと言っている。

C：残置されたスリング/古ロープは降雨後、水分を長く残すので、例えばステンレスとて「錆び」を助長する原因となると言っていた。ステンレスでも錆びるのか？

Q：酸性雨などの影響できっと簡単に錆びてしまうのだ。

ノダはある命題を「聞き手側から見た解釈として」提示しているため、聞き手にとってはノダ文をQノダとして受け入れることが最もコストが低い発話解釈である。しかしこの場合「最近は酸性雨などの問題も多い」ということは世間で広く知られていることであり、そのままでは聞き手にとって関連性が低かったと考えられる。そのため、Qノダとしてそのまま受け入れることはせず、自己の疑問を解く最も関連性が高い発話解釈を得るため、先行発話と関連づけたと考えることができる。

注22 例えば、林（1964：284-286）の「ノは、いったん判断された内容を、もう一度なんらかの判断材料にするためのはたらき、いわば、客体化、概念化のはたらきをする」という記述を見ると、そのような区別が（無意識にせよ）働いていたように思われる。しかし、続けて「ノ（ダ）は、かくて、二重判断の第二次の判断にあずかる。しかじかという判断（の内容・事実）が成立する、という判断に関係する」と述べていることから分かるように、そこで用いられている既定性とはやはり「事態の既定性」である（下線引用者）。

参考文献.

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏広（2000）松岡弘監修『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク。
- 国広哲弥（1985）『『のだ』の意義素覚え書』『東京大学言語学論集'84』東京大学言語学研究室， pp.5-9.
- 国広哲弥（1992）『『のだ』から『のに』・『の』へ』—『の』の共通性』カックンブッシュ寛子他編『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会， p p17-34.
- 佐治圭三（1997）『『～のだ』の中心的性質』『京都外国語大学研究論叢』L 京

- 都外国語大学機関誌編集委員会, pp.208-217.
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I』 和泉書院.
- 中右実 (1983) 「文の構造と機能」 安井稔他共著 『英語学大系 5 意味論』 大修館書店, pp.548-626.
- 名嶋義直 (2001 a) 「ノダの持つ『手続き的意味』に関する一考察」 『言葉と文化』 2 名古屋大学国際言語文化研究科日本語文化専攻, pp.143-160.
- 名嶋義直 (2001 b) 「『発見のノダ』再考」 『語用論研究』 3 日本語用論学会.
- 名嶋義直 (2001 c) 「ノダ文の提示するもの—『解釈』という観点から」 『ことばの科学』 14 名古屋大学言語文化部言語文化研究会, pp.71-92.
- 野田春美 (1997) 『の(だ)の機能』 くろしお出版.
- 林大 (1964) 「ダとナノダ」 『講座日本語 6 口語文法の問題点』 明治書院, pp.282-289.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』 くろしお出版.
- 三上章 (1953) 『現代語法序説』 刀江書院 (くろしお出版復刊 1972).
- 榊山洋介 (1995) 「多義語のプロトタイプの意味の認定の方法と実際」 『東京大学言語学論集』 14, 東京大学文学部言語学研究室, pp.621-639.
- 森山卓郎 (2000) 「基本叙法と選択関係としてのモダリティ」 『日本語の文法 3 モダリティ』 岩波書店, pp.3-78.
- Sperber, Dan & Deir Wilson (1986/1995) *Relevance : communication and cognition*, Blackwell. (内田聖二他訳 『関連性理論』 第2版 研究社出版 1999).
- Blakemore, Diane (1992) *Understanding Utterances : an introduction to pragmatics*, Blackwell. (武内道子・山崎英一訳 『ひとは発話をどう理解するか』 ひつじ書房 1994).
- Carston, Robyn and S. Uchida (eds.) *Relevance Theory : Applications and implications*, John Benjamin.

